



Title	ご挨拶
Author(s)	杉本, 孝司
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99374">https://hdl.handle.net/11094/99374</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ご挨拶

杉本 孝司

最近開催された言語文化専攻と言語社会専攻が一堂に会する言語文化研究科教授会における研究科長選挙において定年退職教員の内もっとも年長であるという規定上の理由から選挙の立会人を仰せつかった。それまでは何も意識しなかったが、教授会メンバーの今年度定年退職者の中で自分が最年長であることに少々驚いた。そして自分は全阪大専任教員の中でもひょっとしたら最年長なのかもしれない、という考えがちらっと過った時はその驚きが倍增された感があった。誕生月が5月であるので、そんな可能性はないとも言えない。しかし最年長であるということには社会的な期待や責任が相当程度につきまとう筈である。ところが今ここでこのような形でご挨拶させて頂いている私はどうかと言えば、そのような期待に応えなければ、とか歳相応の責任感をもって社会生活を送らなければ、といった意識がまったくない。なぜか今でも意識の上では初めて教職に就いた時と何も変わらない自分がいることに気付いてしまう。なぜなのだろうか？自分は若い頃から精神的に成長することができなかったのだろうか。賢者になれなかったのだろうか。社会人として欠陥人間なのだろうか。と苦悩する訳ではないが何か不思議な感覚に陥ってしまう。多分自分は性格的にそういった側面も持ち合わせているかもしれない。よく言えば天真爛漫、悪く言えば脳天気であることは自分でも認めている。しかしやはり自分の立ち位置について年齢や立場に関係なくいつも同じ気持ちで過ごしてきたのは、偏に英語教室の諸先生方に負う所が一番大きかったのだと今つくづく思っている。一度も自分の職場をいやだと感じることもなく常に楽しく過ごせる雰囲気は英語教室にはあり、普段接する中、だれとでも気持ちよく話ができる、このような希有な職場環境に我が身をおくことができたことは、何にも増して幸せなことであり、このことが原因で私がぬるま湯育ちの精神的に成長することのできない最年長者になってしま

っているとしても、何の不思議もない。却って私はそれを大いに歓迎すべきことだと考える。英語教室は私に素晴らしい温室環境を提供してくださったのだと思う。この場をお借りして英語教室のみなさんに深く感謝致します。もちろん教員生活にとって今一つ大切なのは学生諸君であり、この点においても大阪外国語大学や大阪大学の英語や英語学専攻の学部学生や院生諸君にも本当に恵まれていたと思っている。1973年春から数えて41年間、数多くの学生諸君との出会いがあり、授業でもキャンパスでもいつも楽しい時を一緒に過ごすことができたことは、言い方は古めかしいがやはり「教師冥利に尽きる」としか言いようがなく、数々の出会いを経験できた学生のみなさん全員に感謝申し上げたい。

いつまでも精神的に成長できない私ですが、本年度をもって外国語学部英語専攻の場からは、退場することになります。英語教室の皆様様の今後の増々のご活躍とご多幸とご健康を心からお祈り申し上げますと同時に、英語専攻の増々のご発展を心から祈念しております。みなさま本当に長い間ありがとうございました。